

父親はなぜ息子を殺したのか

——「東京文京区金属バット子殺し事件」の深層（前篇）——

春 日 耕 夫

（受付 2001年5月1日）

1996年11月、東京都文京区で起こった父親による長男殺害事件は、親子関係のあり方という問題に関心を抱いてきた者にとっては衝撃的な事件であった。執拗に繰り返される長男の家庭内暴力に苦悩しつつも、「受容」することこそ長男を立ち直らせる最善の方法であるとの信念に支えられ、二年間もの長きにわたってその暴力を「受容」しようとしてきた父親が、にもかかわらず最終的には受忍の限界を超えたとしてそれまでの「受容」路線を放棄し、自宅マンションの一室で眠っていた長男（当時14歳、中学3年生）の頭に金属バットを振り下ろし、これを殺害してしまったという事件である。

何とも悲惨で不幸な事件ではある。止まるところを知らぬかに見える子どもの家庭内暴力、その暴力に悩まされる親、その親が最終的には子どもを殺し、子どもはその親によって殺される。考えれば考えるほど悲惨で不幸な事件ではある。しかしながら、そういった形で起こる「子殺し事件」は必ずしも過去において例のない事件だったわけではない。むしろ、それ以前にもそのような事件は「稀ならず」起こってきたと言ってよいだろう。たとえば、1977年10月、東京都北区に住む飲食店主が当時高校二年生で16歳だった一人息子を殺害した事件（いわゆる「開成高校生殺人事件」）、あるいは、1992年6月、埼玉県浦和市に住む高校教師とその妻が当時23歳だった長男を殺害した事件（いわゆる「浦和事件」）など、その一例である。しかしながら、そういった、これまでも「稀ならず」起こってきた「子殺

* 本稿は1998～1999年度広島修道大学総合研究所調査研究費による研究成果の一部である。

し事件」のなかにあつて、「東京文京区金属バット子殺し事件」として後々広く知られることとなるこの事件は、特筆すべき事件だったと言ってよいだろう。なぜなら、この事件は、前述のように、「受容」することこそ子どもを立ち直らせる最善の方法であるとの信念に支えられ、その信念にしたがつて子どもを「受容」しようとしてきた父親が、ほかならぬその「受容」の果てに起こした事件だったからである。

それにしても、「受容」することこそ子どもを立ち直らせる最善の方法と信じて子どもを「受容」しようとしつづけた父親が最終的には「子殺し」という地点に立ち至らなければならなかったとは、何という皮肉なことだろう。しかしながら、それこそがまぎれもなくこの事件の「真相」だったのである。とすると、いったいどういうことになってくるのだろうか。その父親が子どもを「受容」しようとしたのは間違いだったということになってくるのではないだろうか。この事件に関する裁判のほとんど全過程を傍聴し、そこでなされた証言の忠実な再現作業に基づいて克明なレポートをまとめた二人の報道関係者のうちのひとり、そのレポートの「あとがき」の部分に、万感の思いを込めて『「受容」……は無力だった』と記している¹⁾。しかし、「受容」は「無力」だったという以上に、「間違い」だったと言うべきなのではないだろうか。とすると、これは大変な問題となってくる。

「受容」という言葉は、おそらく、いま親子関係について語ろうとすると、もっとも重要なキーワードとなっている言葉のひとつだと言ってよいだろう。たとえば、子どもとの関係を豊かに作っていくためには「受容」が何より大事だと語られる。子どもの健やかな成長を促すためにも「受容」が何より大事だと語られる。子どもが何らかの問題行動を起こしたときの親のあり方としても「受容」が何より大事だと語られる。そういった形で、「受容」という言葉は、親子関係や子育て問題について語ろうとする多くの言説のなかに満ち満ちている。まさしくそうした言説に学び、そうした言

1) 鳥越俊太郎・後藤和夫『うちのお父さんは優しい——検証・金属バット殺人事件』明窓出版、2000、375頁。

春日：父親はなぜ息子を殺したのか

説に教えられて、子どもを「受容」することこそ何より大事だという信念を抱くに至ったのが、「東京文京区金属バット子殺し事件」の父親だったのである。そして、そうした信念に支えられ、そうした信念を拠り所として必死に長男を「受容」しようとしつづけた挙げ句の果てに、ほかならぬその長男を殺害するに至ったのが、この事件の父親だったのである。とすると、この事件は、親子関係のあり方として「受容」が何より大事だと語り、子どもの問題行動への対処のしかたとしても「受容」が何より大事だと語る言説の妥当性に対して、深刻な疑問を投げかけた事件だったと言ってよいのではないか。

この事件について克明に報告した上記レポートによれば、この事件の父親は東京地裁から言い渡された一審判決をそのまま受け入れ、「懲役三年」の刑に服したという。その場合、未決拘留期間400日が「懲役三年」という刑期に算入されることとなっていたという。とすると、いまはその刑期も終了し、父親はすでに出所しているはずである。そういった意味では、この事件は、法律的な意味ではすでに決着済みの、完全に「過去の」ものとなってしまった事件と言うべきだろう。しかしながら、親子関係のあり方として「受容」が大事だと語り、子どもの問題行動への対処のしかたとしても「受容」が大事だと語る言説の妥当性に対してこの事件が投げかけてきた疑問に答えるという作業は、ほとんど手つかずのままである。そういった意味では、この事件は、まだまだ「過去の」ものとして片づけてしまうわけにはいかない事件と言うべきだろう。

それでは、この事件が投げかけてきた上記のような疑問に対しては、どのように答えればよいのだろうか。

ここで筆者がとりわけ注目したいと思うのは、精神科医師齊藤学の著書『「家族」はこわい』である。「母性化時代の父の役割」というサブタイトルを付されたこの著書は、この事件についてまともに論じた論考がほとんど皆無に等しい状況のなかで、真っ正面からこの事件を取りあげて論じようとした唯一の論考と言ってよいだろう。そこで展開されている見解はきわ

めて説得的なように思われる。しかしながら、少し厳密に考えようとする
と、さまざまな疑問がわいてくる。たとえば、同書のなかで「この子殺し
は……徹底的に子どもと寄り添おうとした父親の破綻だ」と述べられてい
る点である²⁾。

果たしてそうだろうか。そこで述べられているように、この事件は、「徹
底的に子どもと寄り添おうとした父親の破綻」だったと言ってよいのだろ
うか。その点、大いに疑問だと筆者は思う。

さらに、この書に付された「母性化時代の父の役割」というサブタイト
ルにも大いなる疑問をかきたてられる。そういったサブタイトルから判断
するかぎり、この書の著者は、「いま」という時代を「母性化」の時代とみ
なしているのではないだろうか。そして、そういった時代のなか、父親に
は父親の果たすべき役割があるにもかかわらず、父親はその役割を果たし
ていない、だからこそさまざまな問題が起こっているのだと主張するつも
りなのではないだろうか。仮にそうだとするなら、その点も大いに疑問だ
と筆者は思う。

同じことは、同書の106頁から始まる項に「『母性化』の悲劇——金属バツ
ト子殺し事件」というタイトルが付されているという点についても言える
だろう。このタイトルから判断するかぎり、この著者は以下のように主張
するつもりなのではないだろうか。すなわち、父親には父親としての役割
があるにもかかわらず、父親はその役割を果たさず、「母」のごとき存在と
なっている、その結果としてもたらされた「母性化」の悲劇、それ
が「東京文京区金属バット子殺し事件」なのだ、と。もしそうだとする
なら、その点も大いに疑問だと筆者は思う。

齊藤学についてはあらためて説明するまでもあるまい。おそらく家族問
題や親子関係といった領域ではいまの日本でもっとも著名な、そして、もっ
とも影響力のある論者と言ってよいだろう。単に医師としてのみならず、文

2) 齊藤学『「家族」はこわい——母性化時代の父の役割』日本経済出版社、1997、
21頁。

筆家としても、研究者としても、また社会的実践家としても傑出した業績の持ち主である。筆者自身、氏の著書や論文には多くのものを学んできた。そういった意味では氏に対して少なからず畏敬の念を抱いてきた者である。その筆者にとって、氏に対して批判的見解を述べるということはいささか勇気の要ることである。しかしながら、『「家族」は怖い』で展開されている氏の見解に関するかぎり、大いなる疑問を抱かざるをえない。それが筆者の正直な感想である。

以下、本稿では、同書で展開されている見解に批判的検討を加えていくことを通して、「東京文京区金属バット子殺し事件」が投げかけてきた問題に対する筆者なりの回答を模索していきたいと思う。しかしながら、本論に入るに先立って、まずはこの事件の概要について述べておくこととしよう。

＊

この事件についてはすでにいくつかのレポートが公にされている³⁾。それらによれば、長男の暴力が始まったのは事件が起こるちょうど二年前、1994年11月のことだったという。朝自分では起きられず、母親に起こされてようやく起きていた長男（当時中学1年生）は、その日の朝、いつものように起こそうとして声をかけた母親の頭をいきなり殴り、蹴飛ばし、突き飛ばした挙げ句、台所のテーブルの上に置いてあった薬ビンを母親めがけて投げつけ、その額に命中させてしまったというのである。その日以来、それまでは朝起こされても「うるさいな」と不機嫌に言うことはあっても、暴力を振るうことはなかった長男が、三日に一度くらいの割合で暴力を振るうようになり、母親を殴ったり蹴ったりするようになっていくのである。

はじめは母親にのみ向けられていたその暴力は、やがては父親にも向け

3) 筆者の知る範囲では、鳥越俊太郎と後藤和夫による前掲書のほか、前田剛夫『父の殺意——金属バット事件を追って』（毎日新聞社、1998）、吉岡忍「父親の真実——金属バット殺人事件」（『文芸春秋』1998年1月号、262－279頁）がある。ただし、この事件の経過に関する以下の記述はすべて鳥越俊太郎と後藤和夫による前掲書によった。

られるようになっていく。そのことに驚き、困惑した父親は家庭内暴力や思春期問題について書かれた本を買い求め、長男への対処のしかたを模索していく。その結果父親がたどりついたのが「受容」が何より大事だという結論だったのである。

その間の経緯について、父親は、この事件に関する審理が行われた東京地裁の法廷で次のように証言している。

＜弁護人質問＞この日〔長男の暴力が初めて父親に向けられた日〕以来あなたは何をしましたか？

＜父親＞11月2日〔長男が初めて母親に暴力を振るった日〕のこともあったので、本屋に行き、家庭内暴力や思春期の本を何冊か買って読みました。

＜弁護人＞読んで、政彦君〔長男の名前、ただし仮名〕とどう対処しようと思ったのですか？

＜父親＞ひとつは親の愛。一番いい医者は親の愛だということ。親が一番いいと思っていました。もうひとつは拒絶ではなく親が受けとめること。これについては〔以前通っていた〕専門学校で学んだこともあるのですが、「受容」と関係があって、そうなんだ、受け入れてあげることが大事なんだという、その二点を感じました。

＜弁護人＞受け入れるということですが、暴力のときはどうするんですか？

＜父親＞殴り返したりしない、抵抗しないことだと、私は思いました⁴⁾。

こうして、父親は、「親の愛」とともに、「受容」すること、「受けとめる」こと、あるいは「受け入れる」ことが何より大事だという結論を得るに至るのである。その場合、長男の暴力に対しては決して殴り返したりしないこと、抵抗しないこと、それが「受容」することだというのが父親の理解であった。それゆえ、父親は、そのとき以来、長男の言うまま、なす

4) 鳥越・後藤、前掲書、134頁。ただし〔 〕内は筆者による補足。また、引用文中の強調点は引用者が付したものである。以下同じ。

春日：父親はなぜ息子を殺したのか

がママの暴力に身をさらしていくこととなる。

しかしながら、それでも長男の暴力は治まらない。それどころか、止まるところを知らないかのように続いていく。その様子を父親は次のように証言する。

<弁護士>奥さんが実家に帰った頃〔1995年2月〕にも事件がありましたね？

<父親>政彦が〔当時の人気ロックバンド〕X-JAPANに心酔していました、政彦の心の支えだったと思うのですが、暴力の間も彼を支えていて、一人のファンとしてですね。ある日政彦が〔X-JAPANの〕メンバーの一人(ヒデ)の赤い帽子が欲しいと言い出しまして、私と一緒に買いに行きたいと言い出しました。私はお金がなくて、それを言ったら〔政彦に〕叱られて、うちのなかにあったお金を何とかかき集めました。7時ちょっと前だったと思うのですが、二人で自転車で外に出ました。外に出てしばらく行くと、政彦が「もういいよ、帰ろう」と言いました。顔を見ると、〔いつもと様子が〕かなり違っているのです、私は帰ったら殴られると思い、落ち着かせようと30分ぐらい押し問答になりました。そうしたらお店が開いている時間に間に合わなくなって、結局は帰りました。

<弁護士>殴られると思ったのですか？

<父親>帰りながら70%は殴られる、政彦が荒れると思ってしんどい気持ちで帰りました。

<弁護士>帰ってどうでしたか？

<父親>帰ったら政彦がドアにチェーンをかけ、奥の部屋に行き、「土下座しろ」と言いまして、土下座したら、それから暴力が始まりました。(中略)足で蹴り、手でも殴り、こたつの板を投げつけるという暴力で、この時、政彦は泣いていたと思います⁵⁾。

5) 同上，137－138頁。

こうして、長男の暴力はますます激しく、ますます陰惨なものになっていく。その暴力のため、家庭は「修羅場」と化していく。その「修羅場」から逃げ出すような形でやがて母親は家を出ていくこととなる。

父親は次のように証言する。

<弁護人>〔母親の〕家出のきっかけとなった暴力はどんなものでしたか？

<父親>7月の10日頃のことです。政彦は朝はいつも荒れるのですが、その日も荒れまして、その日はそれがすごくて、強い暴力が起こるという場面が想像されました。政彦は妻に「こっちに來い」と言いまして、妻は娘の鍵のかかる部屋に逃げ込みました。政彦はイスを持ち上げドアにぶつけるという非常に危険な状態で、私が止めたのですが、妻と娘は隙をついて外に出たのです。政彦は追ったのですが、玄関の外までは行きませんでした。玄関の外では暴力は振るわないんですね。しだいに収まって、そのまま学校に行きました。

<弁護人>それが原因で奥さんは家を出たんですね？

<父親>ええ⁶⁾。

同じ場面を、政彦の姉で当時短大生だった長女は次のように証言する。

<長女>弟が朝から暴れるのが分かっていたので、私はその前の日から短大の宿題の準備をしていたので、気にしないようにしていました。

<弁護人>いつもそうなのですか？

<長女>朝起こすときはいつも〔母親が〕殴られていました。

<弁護人>その日は？

<長女>直接見ていないのですが、母が私の部屋に入ってきて、「どうしたの？」と聞くと、何も言わずに鍵をかけました。マーちゃんが来て「開け

6) 同上, 147-148頁。

春日：父親はなぜ息子を殺したのか

ろ、開けないと殺すぞ」と言って、ドアをどんどん叩いて、また大変なことになったと思いました。

<弁護士>マーちゃんの言葉はそうだったのですか？

<長女>「開けろ、開けないと殺すぞ」でした。ドアを開けると私も母もやられると思ったので、開けないようにして、私は「お母さん、窓から逃げなよ」と言いました。でも母は私に迷惑がかかるから、ドアから出ようとしていて、私は止めました。その間も弟はどんどん叩いて。ものすごく怖くてドアを開けることはできませんでした。(中略) そのうち物音がしなくなって、マーちゃんが離れていくのが分かったので、その隙に母は家の外に逃げていきました⁷⁾。

こうして母親は「修羅場」と化した「わが家」から生命からがら逃げ出していくこととなる。当然、後に残された父親はひとりで長男と向き合っていくこととなる。その父親に長男の暴力は集中的に向けられていく。

その暴力の一場面を父親は次のように証言する。

<弁護士>その後〔奥さんが家を出ていった後〕どうになりました？

<父親>2, 3日は妻が帰ってこないということがわかって落ち着いていたのですが、ある日のこと、その日体育の授業があり、体育着を別な袋に入れるのですが、私はそれをやっていなくて、用意が出来ていなかったのです。政彦は突然怒りだして、針金のハンガーを〔延ばして〕一本にして、それで私の頭を殴りました。血が出るまで私は殴られました。

<弁護士>何回ぐらいですか？

<父親>10回から15回ぐらいだと思います。

<弁護士>血が出てどんな気持ちでしたか？

<父親>私は殴られて血を流すという経験がないんですね。血が髪の間か

7) 同上, 148-149頁。

らたらんと流れてきて、政彦もびっくりしてやめたんだと思います。鏡を見てびっくりしました。

＜弁護人＞初めて血を流したんですね？

＜父親＞私にとっては初めてのことでした⁸⁾。

こうした暴力の嵐のなかで父親はどんどん追いつめられていく。そして、やがては「死にたい」という思いをさえ抱くようになる。

父親は次のように証言する。

＜弁護人＞奥さんが家を出た後クリニックに死にたいと言ったことがありますね？

＜父親＞はい。

＜弁護人＞どんな気持ちだったのですか？

＜父親＞暴力がない日が4, 5日あると、一週間に一度くらいまた暴力がある。ちょっとしんどくなって、言ったんだと思います。

＜弁護人＞こんなに頑張っているのに、同じだなという感じですか？

＜父親＞そうです。

＜弁護人＞よくなって来ると期待と、暴力の繰り返しなんですか？

＜父親＞ええ。落ち着いてくると「お父さん」と言うのに、殴りはじめると「てめえ」と言って落差があるんです。その繰り返しですね。

＜弁護人＞何が一番つらかったですか？

＜父親＞その頃は暴力が治らないということ、殴られっぱなしであることです。政彦の要求で、食べ物とかいろいろなものを買いに行かされる。それが受け入れることだと思って従うのですが、非常に虚しい、苦しい。こういうことをして本当によくなるのだろうかという思いもあり、それなら他の方法はあるのか、でも見つからないというような、そういうつら

8) 同上, 156-157頁。

春日：父親はなぜ息子を殺したのか

さです。

<弁護士>自分たちの対応がこれでいいのかと思ったのですね。

<父親>私たちの対応が却って政彦を悪くしているのではないかという疑問があって、それなら私がいらない方がいいのではないか、親という依存がないほうがいいのではと思ったのです⁹⁾。

荒れ狂う暴力。理不尽な要求の数々。「受容」しても「受容」しても改善の兆しが見えないどころか、ますます激しくなっていく長男の暴力。そういった現実直面して、父親は、いままでの自分たちのやり方が間違っていたのではないかという疑念を抱く。それはおそらく父親がそれまで抱いてきた「受容」路線に対する信頼が揺らぎ始めたときだったと言ってよいだろう。

考えてみれば、このときこそ、最終的には「子殺し」という結末に至る「受容」路線に決別を告げ、長男の暴力に対する対応のしかたを切り替えていく絶好のチャンスだったのではないだろうか。ところが、まさしくそのとき、父親をもう一度もとの「受容」路線に引き戻し、いったん揺らぎ始めていた父親の「受容」路線に対する信頼をそれまで以上に確固たるものとさせたのは、当時父親が通っていたクリニックの医師によるアドバイスだった。その医師は、「奴隷のようにこき使われるのが耐えがたい」と訴える父親に、「それもひとつの技術ですよ」というアドバイスを与えたというのである。

父親は次のように証言する。

<弁護士>その頃バスケットの練習につき合わされることがありましたね？

<父親>近くにバスケットの練習をするところがあって、夜8時から10時頃まで、練習につき合わされるのです。

9) 同上、159－160頁。

<弁護士>あなたは何をするのですか？

<父親>シュートのこぼれ玉を渡すという役目で、ちょっとしんどいといった感じでした。

<弁護士>そんなストレスは、クリニックには言いましたか？

<父親>「言ってみれば、奴隷のようにこき使われるのが耐えがたい」と訴えたら、先生は「そういうこともひとつの技術です。お父さん頑張ってください」と言いました。私は、「ああ、これもひとつの技術なんだ」とストンと胸の中に落ちてきて、ほっとしました。

<弁護士>後々までその技術は続いたのですか？

<父親>ほっとしたのです。本当にこれでいいのかなあと思い、親しい友人にも言いましたら「そうなんだよ」ということで確信を与えてくれたので、それ以後は暴力も含めて、受け入れることがおかしいとは思わなくなりました¹⁰⁾。

こうして、いったん揺らぎ始めていた父親の「受容」路線に対する信頼は、「奴隷のようにこき使われるのもひとつの技術ですよ」という医師のアドバイスによって、それまで以上に確固たるものとして再建されていくこととなる。そして、そのとき以降、父親は、いかなる暴力や理不尽な要求に対してもそれをそのまま受け入れていくのが「受容」だと信じて、長男の暴力や理不尽な要求の数々を「黙々と」受け入れようとしていくのである。

しかしながら、それでも長男の暴力は治まらない。治まらないどころか、ますます激しく、ますます陰惨に、そしてますます執拗になっていく。

以下、そうした暴力の場面について、その一例のみを挙げておこう。

その暴力は、かねてから父親が長男に命じられていたビデオ録画をめぐって起こった暴力であった。問題の番組は土曜の深夜（正確には日曜日の朝）

10) 同上、166－167頁。

春日：父親はなぜ息子を殺したのか

1時過ぎに放映される『リングの魂』という番組で、長男の好きな番組だったという。その番組を長男は起きて見ているときもあったが、その日は眠っていて、そういうときはビデオに録画するのが父親の仕事となっていた。ところが、その日、父親が録画を初めて15分もするとテレビの画面がザーッという故障のような画面になって、映らなくなってしまったのである。父親は狼狽する。万一録画できないと長男の怒りと暴力を爆発させる。父親は長男の部屋にあるもう一台のテレビで録画しようと、懐中電灯を片手に、長男の部屋に入っていく。ところが、長男の部屋のテレビもザーッという画面で映らない。後で判明したところによると、ケーブルテレビの工事が原因で生じたトラブルだったのであるが、その時点ではそれと知る由もない父親は、テレビとビデオデッキを前に右往左往することとなる。やがて目覚めた長男に父親は事態を説明する。

以下、長い引用になってしまうが、父親の証言をそのまま引用することとしよう。

<弁護人>〔長男の〕反応は？

<父親>それ〔父親の説明〕を聞いて最初は穏やかでしたが、そのうち「どうするんだ？」と言い出しました。

<弁護人>体の状態は？

<父親>半身を起こして、布団のなかで座っていたという恰好です。

<弁護人>あなたはどのようにしていましたか？

<父親>私は布団の裾の方に正座していました。

<弁護人>正座ですか？

<父親>正座です。

<弁護人>「どうするんだ？」と言われてどうしました？

<父親>事態が分からないので、どうしていいか分からず、以前も録画を忘れたことがあって、結局は友人からダビングさせてもらうしか道はないのですが、それを知っておきながら「どうするんだ？」と聞くので、どうして

いいのか分からないことで、うろたえているのが伝わったと思います。

＜弁護士＞自分が混乱していたんですね？

＜父親＞そうです。

＜弁護士＞政彦君は？

＜父親＞段々いらだててきました。

＜弁護士＞どうになりましたか？

＜父親＞顔や目つきが厳しくなってきました。

＜弁護士＞あなたは？

＜父親＞政彦は弁解するのを嫌うのです。事実でも弁解に聞こえるでしょう。私の責任だと追及して、それが厳しくなって……。

＜弁護士＞それであるとき爆発する？

＜父親＞最初は手か足で殴られるのです。

＜弁護士＞その後は？

＜父親＞これまでもそうでしたが、政彦も痛いので、もので殴るようになっていきました。その夜はプラスチックのバットを玄関から持ってきて……。

＜弁護士＞それでどうになりましたか？

＜父親＞先ほどのところに座り、私は裾の方に座っていたのですが「どうするんだ？」と聞いてきたのです。

＜弁護士＞どう答えたのですか？

＜父親＞私が説明するのですが、それが政彦をいらだたせるので、収まってくれるように「すいません」というお詫びの言葉を言いました。

＜弁護士＞政彦君は？

＜父親＞それを聞くとバシッと殴りまして、「どうするんだ？」と言うのでまた「すいません」と。

＜弁護士＞バットでどこを殴るのですか？

＜父親＞左の顔面をバシッと殴りました。頬骨のあたりです。

＜弁護士＞軽く殴るのですか？

春日：父親はなぜ息子を殺したのか

<父親>力一杯、思い切って殴ってきます。

<弁護士>あなたはどうしたのですか？

<父親>何か答えないと殴るのです。私が何か言おうとすると殴る。私も事態が分からず、テレビの録画について安易に言えず、「すみません」と言うしかないのです。

<弁護士>どうになりました？

<父親>何回か殴ってから「次にすみませんと言ったら、5回余計に殴る」と言いました。

<弁護士>「すみません」も許さないのですね？

<父親>そうです。そういう言い方も許さないのです。私は困って言う言葉がないんですね。黙っていると「なんで黙っているんだ？」と言ってバシッと殴る。

<弁護士>あなたが黙っていても殴るんですか？

<父親>「今から五つ数える間に何か言え」と、1, 2, 3とカウントして5までに言えないと殴りました。

<弁護士>痛そうな顔をするとか、防ぐとかはしないのですか？

<父親>この時だけではなく、これまで「防ぐな」ということで防がせないのです。「痛そうな顔をするな」「声を出すな」と、ただ殴られているのが普通だったので、この日もただ殴られていました。むしろ自分の顔を向けて殴られていました。

<弁護士>顔を差し出していたのですか？

<父親>ええ。

<弁護士>自分の声は聞こえるのですか？

<父親>非常に痛くて、数を数えるのを聞きながら待っているのは我慢できず、声が出てくるのです。「ウッ」と言ったり、自分のうめき声が出てくるのです。

<弁護士>例えて言うとどんな感じですか？

<父親>悲鳴というか、非常に痛くて早くやめて欲しいので「ヒーッ、

ヒーッ」という感じで、悲惨で惨めな感じでした。

＜弁護人＞姿勢は？

＜父親＞正座して、手は膝に乗せて、顔を差し出しているという姿勢です。

＜弁護人＞痛かったでしょうね？

＜父親＞思い出すのもいやな場面です。心身ともに非常にいやな状態でした。

＜弁護人＞心もですね？

＜父親＞精神的にも追いつめられた状態で、痛さを我慢するといっただけで、一刻も早く終わって欲しいと思いました。

＜弁護人＞政彦君に変化は？

＜父親＞途中で政彦は「こっちの太い方じゃ痛くないな」と、太い方を持ち、柄の堅い方で殴り始めました。

＜弁護人＞そこで殴り始めたのですね？ どこを殴りましたか？

＜父親＞私の頬骨に当たりました。

＜弁護人＞音は？

＜父親＞音が変わり「カッ」「コン」というか、そう変わり、非常に痛い、何倍も痛いのです。

＜弁護人＞さらに痛い暴力ですね？ 政彦君の言葉は？

＜父親＞同じように「どうするんだ？」という追求の仕方です。

＜弁護人＞あなたの姿勢が崩れることもあったのじゃありませんか？

＜父親＞痛いので横倒しになることもありました。そうすると「大げさにするな」といわれ……

＜弁護人＞かえって怒る？

＜父親＞そうです。リアクションするなど。

＜弁護人＞あなたは？

＜父親＞倒れないように正座をしっかりと殴られている。

＜弁護人＞防がない？

＜父親＞防ぐことは最初からしません。

春日：父親はなぜ息子を殺したのか

＜弁護人＞終わり方は？

＜父親＞いつもそうですが、怒りが彼のなかで段々高いところから下がってくるというか、醒めてくる過程があって、彼も殴ることに興味がなくなるといふか、怒りが続かなくなってきた、彼の怒りがしぼんできて「もういいよ、あっち行け」という感じで終わりました¹¹⁾。

以上、非常に長い引用になってしまったけれども、こうした暴力こそ父親がひたすら「受容」しようとしつづけた暴力だったのである。その陰惨さは目をおおうばかりである。しかしながら、父親は、その陰惨な暴力を、あたかも「奴隸的屈従」とも言うべき態度で「受容」しようとしつづけたのである。「奴隸のようにこき使われるのもひとつの技術ですよ」という医師のアドバイスに説得されて。

そうして、父親の「奴隸」のごとき「受容」は続いていく。1996年11月6日早朝、自宅マンションの一室で眠っていた長男の頭に金属バットを振り下ろし、その生命を父親が一挙に奪ってしまうそのときまで。それは、長男の暴力が初めて母親に振るわれた1994年11月の時点から数えて丸2年、「奴隸のようにこき使われるのもひとつの技術ですよ」というアドバイスが与えられた1995年9月の時点から数えても1年2ヶ月という、長きにわたる「受容」であった。

＊

以上、「東京文京区金属バット子殺し事件」の概要について述べてきた。

最初に述べたように、この事件は、親子関係のあり方として「受容」が大事だと語り、子どもの問題行動への対処のしかたとしても「受容」が大事だと語る言説に対して、深刻な疑問を投げかけてきた事件であった。その疑問とは、言うまでもなく、「受容」こそ間違いだったのではないかとい

11) 同上、199－204頁。

う疑問である。その疑問に対して、いったいどのように答えればよいのだろうか。

ここで、不必要な混乱を招かないために、筆者の考えをあらかじめ結論的に言っておこう。「受容」が間違いだったというのは間違いだ。——これが筆者の考えである。

それでは、いったい何が間違いだったのか。この事件の父親は何をどのように間違えたために長男殺害という結末に立ち至る結果になってしまったのか。その点について、斉藤学は、前述のように、この子殺しは「徹底的に子どもと寄り添おうとした父親の破綻だ」と説明する。

以下、斉藤がそのように述べている部分について見ておこう。

「金属バットで息子を殺した父親……。この父親の姿勢が報道されていますが、その多くは子どもが不登校となり、暴力を振るいだしてからの様子です。息子の暴力に耐えかね、母と姉は別居。父親が一人で息子の面倒をみています。というより、父親はまるで息子の奴隷となっていたようです。事件の前日も、息子に渋谷でTシャツを買ってこいと命令され、さらにレンタルビデオ屋に行かされ、あげくの果てに帰宅するや、Tシャツが気に入らないと掃除機のホースで顔を殴られています。結局、これらが引き金となり、父親は息子を殺してしまうのですが、それまでの間、父親は実に従順、かつ必死に息子の心を開かせようと努力していたと、多くの新聞・雑誌は報道しています。ある雑誌にこの父親の知り合いがこんなコメントをしています。『Kさんが息子を殺すことができるなら、人間はだれでも、状況次第で息子を殺すことができると思うしかない』。はっきり言えることは、この子殺しは家父長的な父による子どもの制裁というものではなく、逆に徹底的に子どもと寄り添おうとした父親の破綻だということです。』¹²⁾

12) 斉藤，前掲書，20－21頁。

果たしてそうだろうか。この事件を、斉藤が言うように、「徹底的に子どもと寄り添おうとした父親の破綻」と言ってよいのだろうか。その点、大いに疑問だと筆者は思う。なぜなら、この父親が「徹底的に子どもと寄り添おうとした父親」だったとは、筆者には到底考えられないからである。

伝えられるところによると、この父親は、長男の暴力が始まったとき以来、長男を殺害する時点に至るまで、一貫して長男を「立ち直らせる」ということにのみ関心に向けていた様子である。とすると、この父親は、「徹底的に子どもと寄り添おうとした父親」だったというより、むしろ、「徹底的に子どもを支配しようとしつづけた父親」だったと言うべきなのではないだろうか。

なぜか。その理由について説明する前に、まずもって、この父親が一貫して長男を「立ち直らせる」ということにのみ関心に向けていたという点について見ておこう。

前述のように、この父親は、長男の暴力にまったく抵抗しなかったばかりか、防御することすらしないで、自ら進んでわが身を差し出すような形で長男の暴力を受けつづけていた。その父親に対して「なぜそうしたのか？」と問う弁護人の質問に、父親は次のように答えている。

＜父親＞政彦の暴力の背景に、政彦が苦しんでいるというのがあったので、政彦を受けとめてあげる、立ち直ってもらうために受けとめてあげる。政彦が防ぐなというのは、政彦の暴力の背景のつらいところからでている意志だと思うから、それを受け止めてあげる、それが政彦を立ち直らせるための親の対応だと思っていました¹³⁾。

さらに、「なぜ長男の暴力から逃げなかったのか？」「なぜ長男との間に距離をとろうとしなかったのか？」と問う弁護人の質問に、父親は次のよ

13) 鳥越・後藤，前掲書，221頁。

うに答えている。

<父親>〔なぜ逃げなかったか、なぜ距離をとろうとしなかったか、その理由は〕政彦も非常に苦しんでいると思ったのです。

<弁護人>防ぐと言われ、暴力に耐える。それが政彦君から逃げないことだと考えて、それが政彦君を立ち直らせることだと思ったのですか？

<父親>そう思います。どうして離れてという対応がとれなかったかと考えると、防ぐなということで暴力を受け入れる、そういうことが政彦を立ち直らせると思っていたことと関係があると思います。

<弁護人>防ぐなというのが、逃げるなということだと思ったのですか？

<父親>そうです。それが立ち直らせることだと思いました¹⁴⁾。

さらに、また、「奴隷のようにこき使われるのもひとつの技術ですよ」という医師が与えたアドバイスに関しても、父親は次のように語っている。

<弁護人>前年、精神科の「奴隷のように従うのも技術」というアドバイスに従っていましたが、この時も、忠実に従うのは「技術」だと思っていましたか？

<父親>その先生のアドバイスの前に私は悩んでいたもので、そうすれば政彦がよくなると強く思っていて、ずっとそう思っていたのです。9月、10月とずっとそう思っていました。これでいいんだと。ただ現実には良くなりないので、苦しんでいました。

<弁護人>〔長男に命じられるまま〕ひとつひとつ洋服を買うのも、これで治ると思っていたからなんですか？

<父親>政彦の要求に対して応えてあげるのは彼のためになっていると思っていたので一生懸命やりました。(中略)

14) 同上, 221-222頁。

春日：父親はなぜ息子を殺したのか

<弁護士>要求に応えることが直す方法だと思っていたのですか？

<父親>全くその通りです¹⁵⁾。

以上、父親自身が語っている通りである。父親が長男の陰惨で執拗な暴力をひたすら「受容」しようとしつづけたのも、理不尽な要求の数々を黙々と「受け入れよう」としつづけたのも、すべて長男を「立ち直らせる」ためだったのである。そういった意味では、この父親は、一貫して長男を「立ち直らせる」ということにのみ関心を向けていたのである。とすると、ここで考えなければならないと筆者は思うのである。「立ち直らせる」とはいったいどういうことなのか、と。

その答は明白である。それは、「立ち直らせよう」としている側の人間が他のある人間の状態を「好ましくない」状態と判断し、そのうえで、「人はこれこれこのようにあるべきだ」とか「これこれこのようにあるのが望ましい」とその人自身が考えている通りの人間にその人をくならせよう>として、その人に働きかけていく営みなのである。それは、その人がありのままのその人自身のままである>ことを受け入れるのではなく、自らが望む通りの人間になる>ことをその人に要求していく営みなのである。したがって、それは、さらに言いかえれば、自らがその人の意思に「寄り添っていこう」とするのでは決してなく、逆に、自らの意思にその人を「添わせよう」とする営みなのである。とすると、それは、真木悠介の言葉を借りて言えば、「支配の欲求」によって動機づけられた営みであると言ってよいこととなる。

真木悠介は次のように述べる。

「われわれが他者と関係するときに抱く基本の欲求は、二つの異質の相をもっている。一方は支配する欲求であり、他方は他者との出会いへの欲求

15) 同上、274－275頁。

である。(中略) 支配の欲求にとって他者とは、手段もしくは障害であって、他者が固有の意思をもつ主体として存在することは、状況のやむをえぬ真実として承認されるにすぎない。ところが出会いの欲求にとっては、まさしくこのような他者の自由とその主体性こそが欲求される。」¹⁶⁾

こうして、この事件の父親は「徹底的に子どもと寄り添おうとした」父親だったというより、むしろ、「徹底的に子どもを支配しようとしつづけた」父親だったのである。

もちろん、父親自身としては、「徹底的に子どもと寄り添おうとしたつもり」ではあっただろう。また、第三者的な観点から見ても、この父親は、「徹底的に子どもと寄り添おうとした」父親のごとく見えただろう。しかし、たとえ父親自身がどれほど「子どもと寄り添おうとしたつもり」だったとしても、また、第三者の目にどれほど「子どもと寄り添おうとした父親のごとく」見えたとしても、父親自身の関心が子どもを「立ち直らせる」ということにのみ向けられていたとすれば、この父親は現実には「子どもと寄り添おうとした」父親だったのでは決してなく、逆に「子どものほうを自らの意思に服させようとした」父親だったのである。そして、そのかぎりにおいて、この父親は、「子どもを支配しようとしつづけた」父親でもあったのである¹⁷⁾。

16) 真木悠介『気流の鳴る音——交響するコミュニケーション』筑摩書房、1977、181-182頁。

17) この部分の記述に対しては「そういった状態に子どもがあるとき、子どもを立ち直らせたいと思うのは当然ではないか」という反発が出てくるのではないだろうか。しかしながら、子どもを「立ち直らせたい」という思いに基づくものであるかぎり、いかなる営みであれ、結局のところ、自らの意思に子どもを「添わせよう」とする営みにしかならないのである。以下、長年にわたる登校拒否の子どもとのかかわりのなかでそのことにより気づいた母親が自らの苦い経験を語った手記の一節を紹介しておこう。次のような一節である。すなわち、「朝、頭が痛い、おなかが痛い、熱を出して登校時刻に起きられない。そんな毎日の繰り返しが続いていた。[だから]『無理して学校へ行かなくてもいいんだよ』と言わざ

したがって、この事件は斉藤学が言うような「徹底的に子どもと寄り添おうとした父親の破綻」だったというより、むしろ、「子どもと寄り添おうとする」意思は最後の最後までつことなく、にもかかわらず「徹底的に子どもと寄り添おうとする」かのごとき姿をまわりに見せながら、また、自分自身でもそのつもりでいながら、実際には終始一貫して「自らの意思に子どもを服させようとしつづけた父親」の破綻、したがって、終始一貫して「子どもを支配しようとしつづけた父親」の破綻だったのである。

- ㄥ を得なかった。いま考えてみると、子どもの気持ちをわかっていただけではない。どうしても行けない状態だから行かせられないということだったのではなかったかと思う。“子どもの気持ちを受けとめて、わかってあげる”とはよく言われても、受けとめるまでに年月がかかる。いつか登校できるのではないか、休んでいれば充電してまた行ける〔ようになる〕のではないかと思う気持ちが抜けきれない。だから、高校に合格したとき、今度は行けるかもしれないと思ってしまった。が、それは見事に裏切られた。入学式に出たことは記憶にあるが、その後何日学校へ行っただろうか。親が授業料やあたたかい暖房費まで納めに行っただけ覚えている。(後略)」(野部瞳『『あたりまえ』のことを何年もかけてわかった』『こみゅんと』NO. 20, 1995. 4., 9 頁)。このうち、強調点を付した部分、すなわち、「……と言わざるを得なかった」という部分は「本当は言いたくないのだけど」という意味であること、「どうしても行けない状態だから行かせられない」という部分は「本当は行かせたいのだけど」という意味であること、また、「休んでいれば充電してまた行ける〔ようになる〕のではないか」という部分は「本当はいまのままでいてほしい」「早く行けるようになって欲しい」という意味であるということについては、あらためて説明するまでもないだろう。それが「共感」でもなければ「受容」でもなく、相手に「寄り添っていこう」とする態度でもないことは明らかであろう。この例からもわかるように、相手に対して「これこれこのようであって欲しい」とか「これこれこのようであって欲しくない」と思う気持ちにとらわれているかぎり、どれほど「共感」しているように見えたとしてもそれは「共感」ではなく、どれほど「受容」しているように見えたとしてもそれは「受容」ではないのである。ある雑誌の「Q and A」コーナーの回答者が、「どうしたら受容し、共感することができるようになるのでしょうか」という質問に対して、「こちらの望むような変化を求めているときは(中略)つらいものですね。受容すれば、共感すれば変化してくれると知っているうちは受容でも共感でもないのですから」と答えているように。雑誌『こみゅんと』NO. 14, 1994. 4., 56頁を参照。

この点ははっきり認識しておかなければならないと筆者は思う。もちろん、この事件の父親を断罪するためではなく、この事件の父親が陥ってしまった「罨」をはっきり認識するために。そして、そういった「罨」に父親を導いていきかねないアドバイスをしてしまった「専門家」たちの間違いをはっきり認識するために。

＊

以上、この事件の父親は「子どもと寄り添おうとした父親」では決してなかったということ、「子どもと寄り添おうとする父親」のごとく見えながら、実際には「子どもを支配しようとしつづけた父親」だったということについて述べてきた。これと同じことが「受容」ということについても言えるだろう。

前述のように、この事件は、親子関係のあり方として「受容」が大事だと語り、子どもの問題行動への対処のしかたとしても「受容」が大事だと語る言説に対して、深刻な疑問を投げかけてきた事件であった。その疑問とは、要するに、「受容」こそ間違いだったのではないかという疑問である。その疑問に対して、どのように答えればよいのだろうか。その点については前述のように、「受容」が間違いだったというのは間違いだというのが筆者の回答である。なぜなら、この事件の父親は一見したところ長男を「受容」していたかのように見えるだろうけれども、現実には、決して「受容」していたわけではなかったからである。

もちろん、父親は長男を「受容」しようとした。「頑ななまでに」と言っているくらい「受容」しようとした。しかし、現実に「受容」することができたのかというと、決してできなかったはずなのである。なにしろ、目をおおうばかりの暴力と理不尽な要求の数々である。どれほど必死に努力したとしても、「受容」することなどできなかったはずなのである。

実際、父親自身が長男を「受容」しようとしながらなおかつ「受容」しかねる気持ちを何度も何度も訴えていたのである。たとえば、1995年の7

月から8月の頃には「死にたい」という気持ちをクリニックの医師に訴えて、抗うつ剤の処方を受けている¹⁸⁾。妻に対しても、「つらいよ」「死にたいよ」「死にたいくらいつらいよ」と何度も何度も訴えている¹⁹⁾。また、同年9月には、前述のように、「奴隷のようにこき使われるのが耐えがたい」とクリニックの医師に訴えて、「それもひとつの技術ですよ」というアドバイスを与えられている。さらに、1996年の8月には再び自殺念慮に襲われている²⁰⁾。こういった形で、父親自身、長男を「受容」しようとしながらなおかつ「受容」しかねる気持ちを何度も何度も訴えていたのである。その気持ちこそ父親の「真実の」気持ちだったはずである。ところが、父親は、その気持ちを、「奴隷のようにこき使われるのもひとつの技術ですよ」という医師のアドバイスに説得されて、抑圧していったのである。そうして、父親は、どれほど必死に努力したとしても現実には到底「受容」できるはずのない長男の暴力と理不尽な要求の数々を、それでもなおかつ「受容」しようとしつづけたのである。

とすると、この父親が現実^レに成し得たことは何だったのだろうか。「受容」だったと言ってよいのだろうか。決してそうでないことは明らかである。それでは、それは何だったのか。「受容」のように見えて「受容」ではないもの。「受容」ではないにもかかわらず「受容」のように見えるもの。それは、すなわち、「偽りの受容」でしかなかったのである。

考えてみると、この父親は、長男が暴力を振るようになってからだけでなく、それ以前の時点においても、長男を「受容」したことなど一度もなく、長男に「寄り添おう」としたことも一度もなかったのではないだろうか。

伝えられるところによると、長男は、幼い頃から人並み以上に敏感な子で、生後3ヶ月の時点から通うこととなった保育園では「数年に一人の敏感な子」と言われ、「こういう子は初めてだ」と言われるほどだったという。

18) 鳥越・後藤、前掲書、159－161頁。

19) 同上、162頁。

20) 同上、231－232頁。

その点について、父親は、次のように語っている。

<弁護人>0歳から息子さんを保育園に入れていますが、どんな子どもでしたか？

<父親>長女も保育園に行っていたのですが、その長女の卒園式に連れていったことがあります。その時見知らぬ建物にはいるのを嫌がって泣いて、泣きやまないんです。この子は非常に敏感だという印象を持ちました。保育園の先生も「数年に一人の敏感な子」と言ったと聞きました。送り迎えの時など、どの子も泣きますが、それもやがて泣かなくなるのに、息子はそれが長引くという印象があります²¹⁾。

同様に、母親も次のように証言している。

<弁護人>政彦君が生まれてからの特徴で覚えていることはありますか？

<母親>近くの保育園に3ヶ月の時から行き、その日は建物が違うのが分かったみたいで、額のところをかきむしって泣いていました。保育園で「こういう子は初めてだ」と言われました。離乳食でないと口を開けなくて、先生に非常に困ると言われたこともあります²²⁾。

このほか、長男のそういった傾向を如実に物語るものとして、次のようなエピソードを母親は語っている。まず、三歳の頃、デパートで客に配っている風船を、長男は「飛んでいくのが怖い」と言って、もらおうとはしなかったという。保育園の夏祭りのときも、金魚すくいの金魚をほかの子は喜んでもらって帰るのに、長男だけは「死ぬのがいやだから」と言って、もらおうとはしなかったという。さらに、「保育園で雑巾を縫うから〔材料のタオルを〕もってらっしゃい」と先生に言われて帰ってきた長男は、「縫えるかな、大丈夫かな」としきりに心配し、しばらくするとまた「大丈夫

21) 同上, 78頁。

22) 同上。

かな」と言って心配するという具合で、結局保育園では「泣きながら縫う」という状態だったという。「お絵描き」の時間にも自分の思い通りに描けないと言って、よく泣いていたという²³⁾。

こういった状態は小学校に上がってからも続いていく。まず、小学校に上がってから行くようになった地元の育成室（学童保育）で「これから自己紹介してもらいます」と先生が言うと、「自己紹介って何？」と泣きながら聞いてきたという。また、育成室では「おうち調べ」という行事があって、育成室に籍を置く1年から3年までの子ども30人くらいの家を一軒一軒訪ねていくのであるが、そのとき長男は「風の音が怖い」と言って行きたがらなかったという。小学校に入学して間もないころの運動会の練習でも「風が怖い」とか「ピストルの音が怖い」と言って、先生にしがみついて泣いたという。また、図工のとき「明日のために空き箱をもっていらっしやい」と先生が言ったというので、空き箱をもたせたところ、「これでいいのかな、大丈夫かな」といつまでも心配していたという²⁴⁾。とにかく一事が万事この調子で、長男は環境の変化や新奇な体験を異常なくらいに怖がり、新しい課題に直面すると必要以上に不安がって泣いたりするなど、極度の不安と恐怖を抱く子どもだったというのである。そのため、保育園時代には「登園拒否」的傾向を色濃く示し、小学校に上がってからは「登校拒否」的傾向を色濃く見せていたのである。

とすると、ここで二つの問題が浮かび上がってくる。第一に、なぜ長男はそのような不安と恐怖を抱く子どもに育ったのかという問題、第二に、長男が抱くに至ったそのような不安と恐怖に父親はどのように対応していったのかという問題である。

まず、第一の問題については、すでに評論家芹沢俊介がその要点を簡潔に指摘している。以下、その指摘を見ておこう。

芹沢は、長男が上述のごとき不安と恐怖を抱く子どもに育った背景的要

23) 同上、79頁。

24) 同上、79－80頁。

因として、＜教導する父＞の存在と夫婦間緊張という二つの要因を挙げている。ここで、＜教導する父＞とは、芹沢によれば、「父としての無謬性を柱にわが子を自分の描いたイメージ路線に沿って、そこから外れることなく教え導いていこうとする父親」である。これを筆者なりに言い換えれば、自分の考えは絶対的に正しいと前提し、「子どもはこれこれこのようであるべきだ」と自らが考える通りの子どもに＜なる＞ように子どもを教え導いていこうとする父親である。この事件の父親は、芹沢によれば、まさしくそのような父親だったというのである。次に、夫婦間緊張という点については、芹沢は、警察調書を直接見る機会があったらしい斉藤学の、「あの家族には息子の暴力以前から緊張があって、父と母の言い争う声がずっと聞こえていたことは事実のようです」という記述を引用する。こうして、この事件の長男は、まず夫婦間緊張のために安全に安らぐ場所を与えられなかったばかりか、＜教導する父＞の存在によって「かくあるべし」と父親が命じる通りの子どもに＜なる＞ことばかりを要求され、ありのままの自分自身のままで＜ある＞ことを禁止されていたのである。そうして、長男は、二重の意味で、安全に安らぐ場所を与えられないまま、幼い生命を生きなければならなかったのである。これがこの長男が上述のごとき不安と恐怖を抱く子どもに育った背景的要因だと芹沢は言うのである²⁵⁾。

芹沢のこの指摘は非常に説得的だと言ってよいだろう。しかしながら、この点に関してはいまのところこれ以上の事実に証拠を入手することが困難であるゆえ、これ以上立ち入って議論するのは差し控えておこう。

次に、第二の問題について。

第二の問題とは、前述の通り、上述のごとき不安と恐怖を抱く子どもに育った長男に父親はどのように対応したのかという問題である。果たして父親は長男を「受容」したのだろうか。あるいは、長男に「寄り添おう」としたのだろうか。

25) 芹沢俊介「金属バット殺人事件はなぜ防げなかったのか」『論座』1998年3月号, 75-76頁。

春日：父親はなぜ息子を殺したのか

その答は、間違いなく“No”である。

前述のように、長男は環境の変化や新奇な体験を異常なくらいに怖がり、新しい課題に直面すると必要以上に不安がったり泣いたりする子どもであった。その長男に対して父親はどのような対応をしたのだろうか。その対応のしかたにこの事件の父親がどんな父親だったかが如実に現れている。

父親は次のように語っている。

＜父親＞毎朝、洋服やランドセルを背負ってからも、〔長男は〕学校に行くのを嫌だと言いました。どうしてと聞くと、「なぜイスに座って前を向いてじっとしてなくちゃいけないの」と言うんです。生まれつき敏感な子で、そういうのがプレッシャーになっていたんでしょうね。いろいろ細かいことを聞いて来るんです。ひとつひとつ私が毎日説明しても行きたがらない。ドアにしがみついて外に出ないんですね。長女や私が引きずるようにして連れていきました。学校では先生が門で待っていてくれました。学校では何もありませんが、そんな状態が小1の初めから2、3ヶ月続きました²⁶⁾。

さらに、父親は次のようにも語っている。

＜父親＞振り返ってみると、政彦のエピソードとして、小学校一年の時のことがあります。すでに証言でも言いましたが、小1の入学式以来すごく行くのを渋って、無理やり行かせて小学校に慣らさせたということがありました。私は一所懸命やったんですが。その後小2の時、小1のことを政彦が思い出して「行けるようになったね、どう思う？」「強くなったと思う」という会話がありました。私は強くなった、政彦が努力したんだと思ったのです。振り返れば小6まで1日も休んでいない。今から考えれば、熱が高くても行っていたんですね。私の眼から見たら、彼は不適合を乗り越えたと思ったし、彼も〔不適合を乗り越えた〕自分でも思ったと思うの

26) 鳥越・後藤，前掲書，81頁。

ですが²⁷⁾。

以上、父親自身が語っている通りである。元来、環境の変化や新奇な体験を極端に怖がり、新しい課題に直面すると必要以上に不安がる傾向のあった長男は、小学校入学という事態に直面して「登校拒否」的傾向を見せ始めるのである。そして、「なぜ学校に行かなければならないのか」「なぜイスにじっと座って前を向いていなければならぬのか」と言い募って、「登校拒否」的心情をしきりに訴えていくのである。その長男に対して父親は毎日毎日ひとつひとつ説明して聞かせたというのである。おそらく、「なぜ学校に行かなければならないのか」と訴える長男に「学校に行かなければならない理由」を説明して聞かせ、「なぜイスにじっと座って前を向いていなければならぬのか」と訴える長男に「イスに座って前を向いていなければならぬ理由」を説明して聞かせたのであろう。そして、長男が抱えているそうした不安や恐怖は本当はもつ必要がないことを説明して聞かせ、そうした不安や恐怖は「乗り越えて」いって「強く」なるよう励ましたのであろう。これが「登校拒否」的心情をしきりに訴えてくる長男に対する父親の対応のしかただったのである。

こういった対応のしかたが何であるかは明らかである。それは、相手が訴えてくる気持ちや感情をきちんと受けとめ、それを共感的に理解し、ともに分かち合っていこうとするのでは決してなく、むしろ、相手の気持ちや感情に対してはその正当性を否定してかかり、逆に、自らの言い分にこそ正当性はあると主張し、その正当性を認めるよう、そして、その言い分にしがうよう相手に要求していく営みなのである。したがって、それは、言いかえれば、相手があるのままだその人自身のままで＜ある＞ことを受容し、それに「寄り添って」いこうとするのでは決してなく、自らが望む通りの人間に＜なる＞ことを相手に要求していく営みなのである。そういった意

27) 同上, 84頁。

味では、この父親は、ここでもまた＜教導する父＞だったのである。

こうして、この父親は、長男が暴力を振るようになってからだけでなく、それ以前の時点においても長男を「受容」したことはおそらく一度もなく、長男に「寄り添おう」としたこともおそらく一度もなかったのである。その父親が家庭内暴力を振るい始めた長男を前にして本を読みあさり、「受容」が何より大事だということを学んでいくのである。そして、その長男を「受容」し、その長男に「寄り添って」いこうとするのである。しかしながら、父親のその営みは、まず第一に、どんなに「受容」しようとしても実際には到底「受容」できるはずのない暴力と理不尽な要求の数々を、それでもなおかつ「受容」しようとする営みであったがゆえに、結局は「偽りの受容」としかならず、第二に、あくまでも長男を「立ち直らせよう」とする意図に基づく営みであったがゆえに、長男に「寄り添っていこう」としているかのごとく見えながら実際には長男を「支配」しようとし、実際には長男を「支配」しようとしていながら表向きは長男に「寄り添っていこう」としているかのごとく見えるという、「欺瞞」に満ち満ちた営みとしかならなかったのである。したがって、この事件は、再度繰り返して言えば、齊藤学が言うような「徹底的に子どもと寄り添おうとした父親の破綻」だったのでは決してなく、こうした「欺瞞」に満ち満ちた対応をしてしまった父親の破綻だったのである²⁸⁾。

28) こう言ったからといって、この事件の父親を断罪したい気持ちが筆者自身にあるわけではない。すでに本文中でも述べたように、この父親を断罪するためではなく、この父親が陥ってしまった「罨」をはっきり認識し、また、そのような「罨」に父親を導いていってしまいかねないアドバイスをしてしまった「専門家」たちの間違いをはっきり認識するために、この点をはっきり認識しておかなければならないと筆者は思うのである。